
輪廻転生の呪い

後手番藤井システム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

輪廻転生の呪い

【Nコード】

N4813BA

【作者名】

後手番藤井システム

【あらすじ】

ナイフで刺され、毒を盛られ、呪いを掛けられた主人公はわずか5歳の少年だった。掛けられたのは眠るたびに悪夢に侵されるといふ呪いだった。痛みを感じる夢の中で、その度に死ななければならぬという呪い。その恐怖の呪いを解くわけではなく逆用してチートな人生を過ごす少年の話。RPGツクールでなかった作品のシナリオを掲載。

01 『呪い』（前書き）

日頃から妄想が好きで、浮かんだストーリーをまとめてみたものがこれです。

俺Tsueee成分が特盛です。

苦手な方はちゃんと回避して下さい。

多段ヒットなのでセービングしても割れます。

我々の業界で、ここまでのガン攻めが許されるのはぷーんこくらいでしょう。

いや、ぷーんこですらやらんかもしれない。

01 『呪い』

ヴァンドール家の屋敷から少し離れた、見晴らしのよいさら地で男と女が剣を交えている。

もうすぐ6歳になるうとうとしている少年、ヘルムート・ヴァンドールは目の前で繰り広げられるその戦いに魅入っていた。

さらさらの銀髪に、一見すると同世代の女性に見間違われてしまいそうほど端正な顔立ち。

そこだけ見れば、誰しもが穏やかそうな印象を受けるだろう。

しかし彼の両眼はそれらを打ち消してしまいそうなほど、激しく燃え盛る炎の色をしていた。

ヘルムートはその両眼に、しっかりと剣の軌跡を焼き付けていた。

「せやあ！」

赤い髪の女戦士が吠える。

「しっ！」

黒髪の盗賊風の男が応える。

女戦士の大剣を、男が双剣でいなす。

本来、大剣の用途は対人用ではなく摩獣用である。

戦場において、甲冑ごと相手を叩き割る場合くらいに用いられるのがせいぜいで、この大陸では使い手が圧倒的に少ない。

ましてや女の大剣使いなど片手で数えられるくらいレアな存在だろう。

それに対するショートソードの汎用性はんようせいは大剣の及ぶところではない。しかし、一般的な戦士ならば盾と剣を用いるのが常で、双剣使いも十分に異端の存在だった。

一合のもとに切って捨てるという女戦士の殺気と、受け流して反撃をうかがおうとする男の殺気。
それらが醸し出す異様な雰囲気^{かも}が場を支配しており、見るものに瞬^{まはた}きすら許さなかった。

女戦士は分厚い鉄板のような大剣を最短の軌道で一閃する。
それに対して男は剣を折らないように注意しながらも、双剣をもつてして大剣を受け止める。

均衡状態を保つてはいるものの、戦いの主導権を握っているのは女戦士の方で、男は反撃する機会をうかがっていた。
大剣をいなす事さえできれば体勢が崩れた隙に反撃できるのだが、それを許さないほど大剣使いの技量は際立っていた。

よく見れば女戦士の体が淡く白い光に覆^{おお}われている。
魔術による体力増幅^{ブースト}の影響だ。

女戦士は大剣を使うための筋力と、その速度を魔術によって補っていた。

女戦士の大剣を男が再び受け止めると、男の方が堪^{たま}らず距離をとった。

その間に女戦士は大剣を左の腰の位置に据え、剣先をそこから後方の地面に触れさせて構える。

女戦士の体を覆う光がやや強くなった。

男は一呼吸つくと、それが大剣使いの誘いだと理解した。

理解はしたが、恐らく時間を掛ける事の方がマズイと判断したのだろう。

不利は承知で覚悟を決めた。。

右手のショートを上段に構えての袈裟切り。
ざんっ！という地面を踏み込む音と同時に、男は女戦士に向かって
飛び出していた。

2人の位置からやや離れた所にいたヘルムートでさえ男の姿が霞ん
で見えるほどの速さだった。

しかし、男の斬撃が女戦士の右肩を捉えたように見えたその瞬間、
男の右手が下から上に切り飛ばされた。

大剣技：地走り《じばしり》

刀の居合に近い技で、鞘走りの代わりに地面を走らせる大剣技。
本来なら大剣技は速度で劣るはずだったが、体力増幅された身体か
ら放たれた斬撃は神速の極致にあった。

斬撃そのものは全く見えなかったが、日頃の鍛錬から母親の技を見
知っていたヘルムートには何をしたのか分かった。

「・・・っ！」

ショートソードを掴んだままの腕が地面に落ちる。
傷口を押さえはしたが、男は悲鳴すら上げずに対峙している。

勝負有りだ。

ヘルムートが安堵したその直後、離れた位置から声が聞こえた。

「アンネ！無事か！？」

今度はアンネと呼ばれた女戦士が安堵する。

遠くから声を掛けてきたのはアンネの夫であり、ヘルムートの父親

であるローゼンだった。

そのさらにずっと後方から、灰色のローブを纏まとった男の姿も見える。

「ちっ……ここまでか……だが、最低限の借りは返していくぞ……！」

男は唸うなるように呟つぶやき、左手で素早く腰の短剣を抜くと、ヘルムートへ向かって投じた。

アンネは先ほどの体力増幅ブーストの反動で体が思うように動かなかった。

もともと魔術は魔法と異なり、魔力以外の代償を必要とする不十分な代物だった。

大抵の場合は術者の血がその代償として使われる。

アンネの場合もやはり血を代償としており、体内の血流量が低下した結果、軽い貧血状態になっていた。

さらに、援軍の到着という幸運がアンネに安堵感を与え、反応が鈍っていた。

アンネの大剣が男の胸を貫くと同時に、ヘルムートの胸に短剣が吸い込まれた。

アンネは男から大剣を引き抜くと、即座にヘルムートの所へ駆けつけて傷口を確認した。

傷自体は深くないが意識を失っており、ヘルムートの唇が青紫色に変色し、体が小刻みに震えている。

毒だ。

「ローゼン！その男の持ち物を調べて！」

やってきたローゼンは即座にその意を汲くみ取った。

刃に毒物を仕込む場合、誤って自身を傷つけたときのために解毒薬を用意している場合があるからだ。

「・・・無駄だ・・・解毒薬は持ってないんでね・・・それに解毒できて意味ない・・・さ」

男が口から血を吐きだしながら言う。

男の傷は肺にまで達しており、どうみても致命傷だった。恐らくはあと数分で絶命するだろう。

「お前・・・最初からヘルムートが狙いだっただの？」

震えながらアンネが問うと男は答えた。

「俺も目の前でお前に弟を殺られたんでね・・・借りは返させて・・・もらっ・・・」

言い終える直前で男は息を引き取った。

男の言葉通り、解毒薬がないことを確認したローゼンはアンネの方を向いて、首を横に振る。

唇を噛みしめ、下を向いたままのアンネだったが、ついに覚悟を決めて言葉を発した。

「ローゼン、これは私の過去の不始末が招いた結果です。ですから私が責任を持って魔術で毒を取り除きます・・・後の事は任せました。」

過去の不始末とは何なのか、どういう魔術を使うのか。聞きたいことは山ほどあったが今は時間がない。

後の事を任される以上、覚悟をしなければならぬだろう。

やや考え込んだローゼンだが、覚悟を決めて答えた。

「・・・わかった。ヘルムートのことは任せる。」

「ありがとう・・・いつからそんなに物分かりが良くなったのかしらね」

アンネは微笑みながら、ヘルムートへと意識を向ける。

「苦しい思いをさせてごめんね、あなたは強く生きてね・・・」

そう言い終わると同時にアンネはヘルムートの胸の短剣を引き抜いた。

傷口が浅いとはいえ、剣が抜けたことで血が流れ出す。

アンネが目を閉じて集中しだすと身体が強く輝き始めた。

魔術によって生命が魔力変換コンバートされているのだ。

ローブを纏った男が遅れて到着し、その光景を見つめている。

アンネの輝きが太陽の輝きと見紛みまがう程強くなった瞬間、静寂とともに一瞬で光は失われた。

その代わりにヘルムートの身体が輝き始め、傷口が塞がっていく。

青ざめていた唇の血色も良くなり、体の震えも治まっていった。

力尽きたアンネの体が地面へと崩れ落ちる。

ローゼンがそれを優しく抱きかかえる。

先ほどの男に続いて、アンネが息を引き取った瞬間であった。

「ヴェルマー、ヘルムートの様子は？」

ヴェルマーと呼ばれたローヴを纏った男は、ヘルムートの体の傷のあった場所を触診している。

しかし何も答えない。

しばらく観察した後、今度は凶器となった短剣を真剣なまなざしで眺め始めた。

「どうなんだ！？無事なのか！？」

業を煮やしたローゼンが焦ったように問いただすと、やや間をおいてヴェルマーが答えた。

「意識は失つとるが傷自体は浅いもんじゃからの。出血量も大したことはない。恐らく傷も残らんじゃろ。」

ヴェルマーは凶器となった短剣を手に取り、眺めながら言葉を続けた。

「何の毒かは分らんが、恐らくアンネの魔術で除去できたはずじゃ……」

「本当か！？」

喜んでいるローゼンをヴェルマーが片手で制す。

「喜ぶのはまだ早い。問題はこれじゃ」

ヴェルマーがローゼンに見せたのは短剣の刃を飾る紋様だった。

「ふむ……見たことがない紋様だが……」

「これには呪いが刻まれておる。」

「なんだとっ！？……どういう呪いなんだ？……治せるのか

!？」

ヴェルマーはおもむろに被っていたフードを取った。

フードの下からは眼鏡をかけた沈痛な面持ちおもて老人の顔が現れた。

利発そうな老人の顔から表情が消えると、一切の冗談を許さない声でこう答えた。

「恐らくじゃが……これは、輪廻転生の呪い《リーンカーネーション》じゃ」

01 『呪い』（後書き）

誤字脱字など文章の不備は脳内置換を、描写の不足は脳内補完をお願いしたい。

セス並みに体力低くて打たれ弱いんで。いやマジで。

02話 『魔法使いの弟子』

ヴァンドール家の書斎のソファアールでは、ローゼンとヴェルマーが向かい合って座っていた。

長い沈黙が続く重苦しい室内とは対照的に、窓の外からはのどかな鳥の鳴き声が聞こえる。

先に沈黙を破ったのはローゼンだった。

「それで・・・輪廻転生の呪い《リーンカーネーション》とはどういうものなのだ？」

灰色のローヴを脱いだヴェルマーは、長く伸ばした白いあごひげを指でもて遊びながらゆっくりと口を開いた。

「ふむ、あれはエートル大陸が起源とされとる呪いじゃからの。おぬしが知らんのも無理はない。」

「あなたとアンネの生まれ故郷か・・・」

「そうじゃ。エートル大陸はおぬしも知っての通り、世界屈指の魔術大国じゃ。」

魔法、魔術、召喚術の研究にも昔から力を入れておった。

輪廻転生の呪い《リーンカーネーション》は、そこでの不老不死の研究の副産物として生み出された魔術と言われておる。」

「それで・・・どういう効果なのだ？」

ヴェルマーはそこで一息つくくと、紅茶を一口啜り説明を続けた。

「輪廻転生の呪い《リーンカーネーション》が発動すると、眠るたびに必ず悪夢を見るそうじゃ。」

その悪夢の具体的な内容まではワシには分からんが・・・

みな数日の内に発狂して・・・自害したと言われている。」

「・・・自ら死を選ぶほどの悪夢とはな・・・
だが輪廻転生と呼ばれるのは何故なんだ？」

「その悪夢から覚めるための条件が合つての・・・
どうやら夢の中で死にさえすれば、その悪夢から目覚めるらしい
んじゃが・・・

それが毎日眠つたり意識を失うたびに繰り返し起こるといふ訳じ
や・・・

さらに夢の中で受けた痛みや苦しみは、現実で受けるものと遜色
なく同じものとして知覚するといわれている。

つまり夢の中で傷を負えば実際に痛みを感じてしまう訳じゃな。
違つのは夢から覚めたときに傷がないことくらいじゃろう。」

ヴェルマーの口からは、止めを刺すかのような一声がそれに続く。

「呪いを解いたという話は聞いた事がない。最近はその話すら聞い
とらん。ワシも実際に見たのはこれが初めてじゃ。」

再び書斎は静寂に包まれたが、今度は長く続かなかつた。

突然、屋敷中に絶叫が響き渡つたのだ。

誰かを呼びかける訳でもなく、何かを唱えるでもない、ただただ大
きな悲鳴だった。

ヘルムートの声を知らなければ、人間が発したとは到底思われなか
つただろう。

慌ててローゼンとヴェルマーが駆けつけたときには、ヘルムートは
ベッドの上で錯乱まぐらんしていた。

端正な顔が台無しになるほど青ざめ、引きつらせ、身体は小刻みに
痙攣けいれん、失禁、嘔吐おうとと、おおよそ人が行いうる痴態ちたいの縮図がそこには
あつた。

「ヘルムート！ヘルムート！」

ローゼンはヘルムートの両肩を押さえ、正面から顔を覗き込んで呼びかけているがヘルムートにはまるで聞こえていないようだった。ローゼンが二度『バシッ！』とヘルムートの顔を軽く叩くとようやく目の焦点が合い、肩で大きく呼吸いきはしているものの正気に戻っていった。

使用人が部屋を掃除し終え、ヘルムートの容態が落ち着いた頃合いを見計らってヴェルマーが問いかけた。

「どんな夢をみたんじゃね？」

「大きな・・・とても大きな魔獣にお腹とか噛みつかれて・・・すごい痛くて・・・血がいつぱい出て・・・お腹から何か見えてた・・・うっ！？」

再び嘔吐しようとするヘルムートだが、既に胃の中が空っぽになっており嗚咽おえつを漏らすに留まった。

「おお、すまんかった。質問を変えようかの。」

ヴェルマーはしわしわの腕でヘルムートの背中を優しく擦りながら再び話しかけた。

「夢の中はどんな所じゃった？」

この質問は意外だったらしく、ヘルムートは答えるまでにやや時間を要した。

「多分・・・森の中だと思う。暗かったし、それに目が覚めたらすぐに目の前に魔獣が出てきて・・・噛み付かれたんだ。」

夢の中の出来事を思い出したヘルムートは、嘔吐こそ催さなかつたものの全身から汗を噴きだし、微かに体を震わせている。

言い終わると同時にヘルムートの震えが大きくなった。

そして、ふと思い出したかのようにヘルムートは声を荒げて2人に訊ねた。

「そうだ！ 母さんは・・・母さんはどうなったの!？」

2人は一瞬、動きを止めて立ちすくみ、ヴェルマーは口を閉ざしてローゼンに目くばせをした。

ローゼンは少考した後、膝を折ってベッドに腰掛けるヘルムートと視線を同じにすると真剣な表情で、決してヘルムートから目を反らさずにすべてを話した。

双剣使いの男は死んだが、その男が最後にヘルムートに短剣を投げたこと。

その短剣には毒と呪いが仕込まれてあったこと。

毒はアンネの魔術によって取り除かれたが、呪いが残ってしまったこと。

そして・・・アンネがその代償に命を失ったこと。

ここまでを話終わると、ローゼンはヘルムートをアンネの寝室へ連れていった。

アンネの遺体は彼女の寝室のベッドに寝かされていた。

アンネの眼はヘルムートと同じ赤い色をしていたが、横たわる彼女の眼は閉ざされている。

もう二度と見ることはできないだろう。

ヘルムートがひとしきり泣き終えた後、3人は書斎へと移動した。

使用人が3人分のお茶を入れ終えて退室すると、ヴェルマーが呪い

について話し始めた。

話が進むにつれて、ヘルムートの顔に恐怖が広がっていく。

ヴェルマーが話し終えると、ヘルムートよりも先にローゼンがヴェルマーに問うた。

「ヴェルマー・・・あなたでも治すことはできないのか？」

ローゼンとしても無理な難題だと分かっているのだろう、声の調子が低い。

呪いを解いた者がいないのだと、たった今も言っていたのだ。

それでも藁にでもすがる思いで、最後の希望に託したのだ。

「いくらワシでも呪いを解くことはできん・・・じゃが、何とかすることは可能じゃろう。」

「ほ・・・本当か？」

「本当じゃ。そうじゃのう・・・」

ヴェルマーは言葉を切り、その先の一言を口にする前に目を閉じた。ヘルムートの背中を擦るのをやめて正面に立つと、ヴェルマーは笑顔でこう言葉を続けた。

「ワシの弟子になって、魔法を学んでみんかの？」

それは衝撃的な話だった。

ヴァンドール家は代々続く騎士の家系で、それも大陸の7剣と呼ばれる名門の貴族だった。

このポードス大陸の騎士においては最高峰ともいえる剣の一族である。

それが魔法使いの弟子になるというのは歴史をひも解いて見ても前例がなかった。

ローゼンは驚いたが、敢えてなにもいわず何やら思案している様子だった。

「でも・・・母さんがいうには、僕の魔力量はとても少ないんだって・・・」

これには逆にヴェルマーが驚いた。

「なんと、アンネに魔法を教えてもらったことがあるんかの？」

「ちよつとだけだけど・・・でもすぐに魔力がなくなっちゃうからあんまり使っちゃダメって言われた。」

「ふむ・・・どんな魔法ができるんじゃね？」

「ぜんぜん大した事はできないよ、影をちよつと動かしたりするくらいしか・・・」

ヘルムートはゆっくりと思い出しながら、実際に魔法を使い始めた書齋の窓から差し込む午後の陽射しを受けてできた影が、ヘルムートの意思とともに変化し始めた。

はじめは影の形が変わる程度だったが、影から影が分裂して円状に変化したり、その大きさが変化したりと多種多様だった。

「あれ？ おかしいなあ、前はすぐに疲れちゃったんだけど・・・」

ローゼンとヴェルマーが口を開く前に、当のヘルムートが驚いて口を開いた。

「魔法は筋肉と同じでの、魔法を使い切った後でその魔力が回復すると、元々の魔力量は増えていくんじゃない。

魔力のことはあまり気にせんでもよい。それにしても『闇の属性』とは・・・アンネと一緒にレアじゃな。」

「うん、あんまり『闇の属性』の人はいないって……お母さんのお母さんは確か『土の属性』だって言ってたし……。」

「知つとるよ、アンネに魔法を教えたはワシじゃじゃからな。それにアンネの母……マーサはワシの魔法学院時代の友人なんじゃよ。ちなみにワシも『闇の属性』じゃ。」

「ええ！？お母さんの師匠だったの？」

ヴェルマーとヘルムートの会話がはずむ中、ローゼンは一人でヘルムートの将来について考えていた。

ヘルムートは一人息子で、このヴァンドール家の大事な跡継ぎだ。

しかし呪いにかかった息子に、この家を継ぐことができるだろうか。奇跡的に呪いを克服したとしても世間体というものがある……ヴァンドール家はただの貴族ではないのだ。

継がないなら継がないなりに、ヘルムートをどうにかしてやらなければならぬ。

『ヘルムートのことは任せろ』……それがアンネとの誓いだ。

それにこの不確定な現状を打破するためには、自分の将来についても考えなければならぬだろう。

「では、ヴェルマー……息子を宜しくお願いします。」

03話 『魔法の修行』

ヴェルマーとの魔法の修行はその日から行われた。

というのも、輪廻転生の呪い《リンカーネーション》はヘルムートが意識を失うと発動してしまうからだ。

ヘルムートが眠る前に教えられることは教えておいた方がいい、というのがヴェルマーの考えだった。

まずヴェルマーが教えたのは『闇の衣』^{ハイド}という魔法で、一種の気配隠しの魔法だった。

「師匠^{せんせい}、こんな感じ？」

ヘルムートは自分の影をやや大きく伸ばした後、それを自分に纏わ^{まと}りつけて覆い隠した。

「上出来じゃ、そこから自分の隠したいものを意識してみなさい。」

「隠したいもの？」

「そうじゃ、そのままじゃとただの真つ黒な塊じゃからの。」

まずは音を消すイメージ、その次は匂い、最後は姿といった順番かの。少しずつやってみなさい。」

ヘルムートは言われた通り、まずは音を消そうと意識してみた。

イメージはしてみたものの、できているのかどうか実際はよく分からない。

『これでいいのか・・・な・・・！？』

喋^{しゃべ}ったはずなのに声がでない。

どうやら成功のようだ。

次は匂いか・・・イメージはしてみたものの、これこそ確認のしようがない。

できたと信じて、最後に姿を消してみるイメージ。周囲に溶け込むような感じだろうか。

おお！？

とたんに不思議な感覚に覆われた。

真っ黒な視界が急にクリアになっている。

それでも魔法が起動していると感覚で分かるのだ。

「驚いたの・・・アンネより飲み込みが早いわい。仕上げは魔力を消すイメージじゃの。」

さすがに魔力を消すイメージというのは難しかった。

魔法の扱いに慣れていないヘルムートは、魔力ではなく魔法そのものを消してしまったのだ。

それでも三回目には成功して見せた。

「よくやった！」

ヴェルマーはそういうと肩をバン！と叩いてヘルムートを褒めた。その衝撃で思わずヘルムートの『闇の衣』が解けて姿が現れた。

「痛いなあ・・・でも師匠には見えてたんでしょ？」

失敗じゃないの？」

「ワシも『闇の属性』の魔法使いじゃからの。」

見破る方法は知っておる。

『闇の衣』を見破るには『闇の衣』に使われた魔力以上の魔力を眼に集めて見ればいいんじゃない。」

なるほど、とヘルムートは思ったがそれでも気になることはあった。

「でも師匠せんせい、これで魔獣から隠れることができても……夢から覚めるには……その……。」

ヘルムートは先ほどの悪夢を思い出し、言葉を続ける事をためらった。

それを察してかヴェルマーは優しく言った。

「安心なさい。教える事はこれだけではない。これはむしろ準備段階なんじゃ。」

「準備段階？」

「左様。これができればもう後は簡単じゃ。」

そこまでいうとヴェルマーは、ヘルムートにもう一度影を纏うように言った。

ヘルムートは手慣れた様子で影を体に纏わりつかせる。

最初は10秒ほどかかっていた作業も、今では2秒ほどに短縮されている。

魔力量は少ないヘルムートだが、こと魔法操作に関しては非凡な才を持っていた。

「よし、魔法を解いてよい。」

ヴェルマーがそう言うと、ヘルムートは首をかしげた。

「今からいう魔法はの、絶対に夢以外で使ってはいかん。

じゃからいったん影を解いて輪廻リンカーネーション転生の呪いの中だけで使っんじや。」

「……うん。」

ヴェルマーの口調から冗談が一切なくなり真剣みを帯びる。
ただ事ならぬ気配を感じてヘルムートも真剣な表情を見せる。

「さっきの状態から、音と匂いと姿を消したのが『闇の衣』^{ハイド}じゃが、
命そのものを消すようにイメージするとどうなるかの？」

ヴェルマーの言葉にヘルムートは絶句する。

それが何を意味するのか直感で理解したのだ。

しかもそれが可能なら、恐らく自分以外の者に対しても可能だろう。
それだけではない、もし他の『闇の属性』の魔法使いにそれをやら
れたら・・・

そこまで考えると恐怖を感じた。

「それって、自分以外の人にする事もできるの？・・・他の人にや
られたりとかもだけど・・・。」

「本当に賢い子じゃの。じゃが安心しなさい。それはそう簡単にな
るもんじゃないからの。」

一言でいうと・・・そうじゃな、魔術を使うんじゃよ。」

「つまり自分の血を使うってこと？」

「正解じゃ、しかも人を殺すとなればかなりの量を必要とするじゃ
ろう。それだけ人に対して術を行使するのは制約がきついんじゃよ。」

魔術は魔法と違って魔力以外の代償を必要とする不十分なもので、
魔法の劣化版ともいわれていた。

しかしヴェルマーは、魔術は代償を必要とする代わりに魔力をほと
んど必要としないのだと言った。

しかも魔法より威力が強く、使いようによっては切り札になりうる
のだと。

「もう一度いうが、その魔術は夢の中以外では使ってはならん。」

そうしてヴェルマーとの修行は終わり、ヘルムートは再び悪夢の中へ入っていった。

悪夢の中、ヘルムートは闇を纏った状態で命が消えるようにイメージした。

徐々に脱力し、視界が暗くなる。

しかし不思議と恐怖は感じない。

それどころか優しさすら感じた。

(闇って・・・なんだか優しい感じがするな。)

翌日、ヘルムートは悲鳴をあげることなく目を覚ました。痛みや苦しみは一切なかった。

客人としてヴァンドール家に滞在しているヴェルマーがヘルムートの様子を見に来た。

「大丈夫じゃったかの？」

やや心配そうにヴェルマーが聞くと、ヘルムートは嬉しそうに答えた。

「師匠せんせい、ばつちりだった！」

翌日からヘルムートの修行は続き、ヴェルマーはその進捗しんぱくぶりに舌を巻いた。

そして半年ほどたったある日

「まったく・・・おぬしの上達の速さには驚きを通り越して呆おろれて

しまつわい。

昨日の今日で成功させてしまつとは……」

「悪夢あくむちの中で一ヶ月くらい練習してきたからね。」

「なんじゃと!? そんな無茶をしておつて……もしもこつちでそれだけ時間が経つとたら死んどるところじゃぞ……。」

「大丈夫だよ、ちゃんと昨日は二日間だけにして試しておいたし。」

どうやらヘルムートの夢の中での時間は、現実の時間とは異なっているようだった。

いくつかの条件でヘルムートが検証してみた結果、いくつかの新発見があった。

1つ目、夢の中で何日過ごしても現実の8時間後には必ず目が覚めること。

2つ目、逆に8時間以内に目が覚めた場合はその時間で目が覚めること。

3つ目、夢の中でも普通にお腹が空くこと。

4つ目、どんな死に方をしても夢から覚めるということ。

5つ目、前回死んだ場所で次の夢が始まること。

6つ目、夢の中の環境は死ぬ直前の状態が維持されるが、本人の肉体的な状態は眠る直前の状態にリセットされること。

そして最後の7つ目はヘルムートの以外な言葉から発覚した。

「でも師匠せんせい、昨日はマジでヤバかった。『闇ハイドの衣』が効かない魔獣がいた。」

ヴェルマーは本を読むのをやめ、目を細めると静かにヘルムートに訊たずねた。

「それはただことではないの……。おぬしの『闇ハイドの衣』はワシ

ですら意識を集中せねば分からん程のレベルじゃ。

並大抵の魔法使いでは気づきもせんじやろう。それを破るとはただの魔獣ではあるまい・・・どんな姿じゃった？」

「頭が3つある犬なんだけど、アホみたいに大きくて魔法もあんまり効かなかった。油断してたから危なく食べられそうになっちゃったよ。」

まあ、なんとかなったけどね！と怯えるどころか、おちゃらけて話すヘルムートに呆れた顔でヴェルマーが答えた。

「よく逃げ切れたのう、それは恐らく番犬ケルベロスじゃ。それに夢の中の場所が分かったかもしれん。」

「いや、さすがに逃げ切れなかったよ。だから倒した・・・ってホント！？場所どこなの！？」

今度こそヴェルマーは絶句した。

彼にしては珍しく顔まで紅潮させて興奮している。

いま何と言ったのだ？

聞き間違いではなかるうか？

ヴェルマーの予想が正しければ、それ《ケルベロス》は魔獣ではない。

しかもそれを倒したというのか！？

「へ・・・ヘルムート、まずは質問に答えてほしいんじやが。おぬしはその番犬ケルベロスをどうやって倒したんじやね！？」

ヘルムートも興奮していたが、ヴェルマーはそれよりもさらに興奮していた。

彼の興奮した様子を初めて目にしたヘルムートは自分の質問もすっかり忘れてしまい得意気に説明した。

「ん」と、師匠が前に『闇の貯金箱』を教えてくれたでしょ？あれを使ったんだよ。」

『闇の貯金箱』は一種の荷物運びのための魔法で、自分で作り出した闇の中に何でも物体を収納する魔法だった。

収容する物体の大きさと重さに比例して魔力量は上昇する。

ただし収容するためには自分の体の一部、たとえば髪の毛や血を刷り込んで置かなければならないという制約があった。また、それ以外に意思のある生物は収納する事ができない縛りがあった。

正確に言えば、収納する事はできるが『出たい』など拒絶の意思表示をされればすぐに出られてしまうのだ。

「あれで、コレを取り出したんだよ。」

そうやってヘルムートが取り出したのは、アンネの使っていた大剣だった。

その大剣の柄には、布でヘルムートの銀髪が数本巻かれていた。

「最初は持つ事もできなかつただけけど、今は結構使えるんだよ。」

ヘルムートの体がやや白く輝き始めた。

魔術ではなく、魔法による体力増幅だ。

そのままの状態でヘルムートはある一点を見つめた。

その視線の先には魔法練習のための^{マト}20m先に立ててある。

「はっ！」

と、息を吐き出すとともにヘルムートの体が素早く足元から順に自分の影に溶け込んだ。

次の瞬間、20m先にある的マトの影からヘルムートが現れる。

大剣技：地走じはしり

アンネがヘルムートに見せた最後の技だった。

直径15cmほどの木が果物を包丁で輪切りにするかのようによく切断された。

ヴェルマーの浮かべる表情に満足した様子のヘルムートは、再び大剣を自分の影の中に片づけた。

自分の質問を完全に忘れていたヘルムートに代わってヴェルマーが口を開いた。

「おぬしの夢の中の世界は、恐らく神獣界じゃ。ワシも召喚術は専門外じゃから詳しくは分からん……」

じゃが、エートル大陸に帰って大図書館ライブラリで調べれば手がかりはつかめるやもしれん。」

そういふなりヴェルマーはヴァンドール家の自分の部屋に戻り荷物をまとめ始めた。

慌ててヘルムートは事情を訊ねる。

「ちよ、ちよっと師匠せんせい！帰っちゃうの！？」

いったんその手を止めてヘルムートに優しく話しかける。

灰色のローヴを着込んではいるがフードは被っておらず、眼鏡をかけたヴェルマーの顔からは笑みがこぼれる。

「ワシも年じゃからのう……。恐らくおぬしはワシの最後の弟子になるじゃろう……。最後に優秀な弟子を持ってワシは幸せもんじゃない……」

その弟子が呪いを解く手がかりを見つけてきたんじゃ・・・師匠が何もせんわけにはいかんじやろう。大丈夫じゃ、おぬしは十分に心が強い。

ワシも安心してエートル大陸に戻れるわい。」
「だめだよ！まだ教えてもらいたいことが沢山あるんだ！」

今にも泣きそうな顔でヘルムートが懇願するが、ヴェルマーは首を横に振る。

「さつきおぬしは、影から影に空間転移したじやろう？」

「うん・・・。」

「あれは『闇の属性』の魔法の中でも最上位に近い難易度の魔法じゃ。」

じゃが特別なセンスが必要というわけではない・・・そうじゃな、理屈で言えば『闇の貯金箱』を応用したみたいなものからの。

恐らく夢の中で相当な苦しい修行をしたんじゃないか？それもかなりの年月を。」

「何日くらい修行したかは数えてないから分からないけど・・・その時は背がかなり伸びてたなあ・・・ヒゲも生えてたし。」

でも一回だけだよ、あんまり長いと現実の事を忘れちゃいそうになるし。」

「そんなことじやろうと思ったわい・・・ばかもんが・・・あれほど危ない事はするなと言ったじやろう。」

じゃが、それだけ自分で頑張れるならワシも安心して旅立てるわい。まあ、心配せずとも一年くらい経ったらまた戻ってくる。

調べ物がもつと早く終わるかもしれんしの。それに手紙は定期的に送るわい。」

ずっと下を向いていたヘルムートだが、その言葉を聞いて思わず顔を上げる。

「ほんとっ!?!」

「本当じゃ。一年経ったら修行の成果を見せてもらうかのう。その時はもっと驚かせてもらおう。」

そういうとヴェルマーはニヤリと笑った。

しわだらけの顔に浮かんだその笑みは、ヘルムートにとって今まで一番の笑みだった。

「分かった!じゃあ、そのときは師匠せんせいをショック死させるぐらい頑張るよ!」

「冗談には聞こえんのう・・・じゃが、無理は禁物じゃぞ?」

「うん!」

ヴェルマーはローゼンに事情を説明し、礼をすませるとその日の内にヴァンドール家を後にした。

そしてその半年後、6歳になったヘルムートはポードス大陸で最高峰の魔法学院に入学することになる。

父親のローゼンには無断で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4813ba/>

輪廻転生の呪い

2012年1月13日02時48分発行